

攻守にバランス

優勝公言 ナイン発奮

「優勝して平成に光星の名を刻む」。兵庫県西宮市の阪神甲子園球場で23日に開幕する第91回選抜高校野球大会(センバツ)に、3年ぶりに出場する八戸学院光星の主将・武岡が誓った。平成最後の今大会、紫紺の優勝旗を東北の地に持ち帰ろうとナインの決意は固い。夢をつかむため全国の強豪にどう挑むのか。同校の戦力と課題を探る。

2018年夏、八学光星は2年ぶりに甲子園に出場した。2回戦で敗れたがベンチ入りした18人のうち武岡ら5人が残った。ベンチは外れたが、県大会で活躍した好打者の近藤や控え投手の後藤も主力に成長した。11年夏から3季連続準優勝を果たした時の田村(ロッテ)、北條(阪神)

光星 狙うは日本一 上 最後平成センバツ



秋季東北大会決勝で盛岡大付を下して優勝を決め、スタンドへ駆けだす八学光星ナイン=2018年10月、秋田市のこまちスタジアム

のよつな「ずばぬけた選手はいない」と仲井監督。しかし、攻守にバランスのとれた選手がそろい、何より「チームとして」

「日本一になれる」と確信し、これまで口にするここのなかった「全国制覇」を口に始めたことが、選手たちの発奮材料となった。

監督の手応えは、昨秋の県大会で早くも芽を出す。八学光星は準決勝の青森山田戦で、かつて幾度もしのぎを削ったライバル校に17-1と大勝。決勝の弘前東戦は最終回に2点差をひっくり返す勝負強さを見せた。

チームをけん引したのは1番伊藤、クリーンアップの武岡、近藤ら打の主軸。特に伊藤は仲井監督が「優勝は彼の活躍が前提」と大きな信頼を寄せるほど攻撃の流れをつくった。下位打線も山から勝負強い打者が座り、チーム打率は4割5分と切れ目がなくなった。

投手陣はエース後藤を

はじめタイプの異なる左右の3人がそろった。完投できる投手は少ない(仲井監督)が状況に応じて投げ分ける技術を備え、県大会は4試合で7失点。自分たちの力に選手は自信を深めていく。

センバツ出場を懸けた東北大会。初戦の専大北上(岩手)戦は、三塁手が本職の下山が公式戦初登板で6回1失点の好投。続く羽黒(山形)、花巻東(岩手)戦では、主戦後藤がエースの気概を見せ連続完投した。決勝の盛岡大付(岩手)戦は、チームの柱の武岡が初回に2点本塁打を放つ活躍。投げては3投手の継投で主導権を渡さず、5-3で勝ちきった。

地方が試される東北大会を危なげない試合運びで制した。日本一を公言し「退路を断つ」覚悟を示した指揮官に率いられて、ナインは東北王者として甲子園の舞台に立つ。

(高松拓輝)